

Ⅳ 再造林の推進に向けたコンテナ苗の通年植栽試験

(実施期間: 令和3年度～6年度 予算区分: 県単 担当: 赤井広野)

1 目的

近年、再造林の省力化・低コスト化の推進のための切り札として注目されているコンテナ苗は、根と土が一体となった根鉢付きであるため、裸苗と比較して植栽後の乾燥に強いとされており、この特性を活かし、伐採、搬出、植栽までを連続して行う一貫作業システムに活用され、通年植栽の可能性が期待されている。しかし、本県の気象条件での通年植栽の可能性は不明であるため、コンテナ苗の植栽時期の限界を明らかにする。

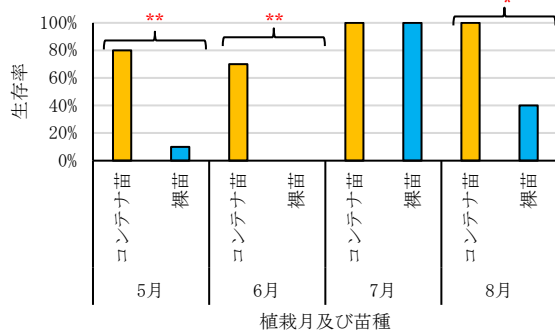
2 実施概要

(1) 方法

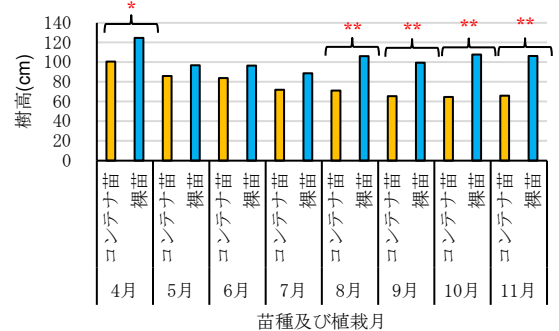
- ①スギ2年生コンテナ苗（根鉢容積 150cc. 以下、「コンテナ苗」。）と、対照苗種としてスギ2年生裸苗（以下、「裸苗」。）を各 40 本購入し、5 月から 8 月の各月上旬に、コンテナ苗及び裸苗を各 10 本抜き取り、こもに包んで屋内に 2 日間保管した後、真砂土を充填した 8 号鉢に植栽した。植栽後、屋外に静置し、雨水及びスプリンクラーで 1 日 1 回 10 分間灌水し、1 か月後の生存率を調査した。
- ②鳥取市及び日南町内において、令和4年及び令和5年に植栽を行った個体の樹高等を調査した。

(2) 結果

- ①1 か月後の生存率は、梅雨時期である 7 月植栽を除き、コンテナ苗の方が裸苗より有意に高かった（フィッシャーの正確確率検定 $P<0.05$ または $P<0.01$ 。図 1。）。コンテナ苗の活用により、通年植栽を有利に行うことができることが示唆された。
- ②令和6年11月時点の樹高は、裸苗の方が高い傾向であった（図 2、3）。また、植栽時の形状比はコンテナ苗が高かったが、2 成長期後には苗種間で差が無くなっていた（図 4）。



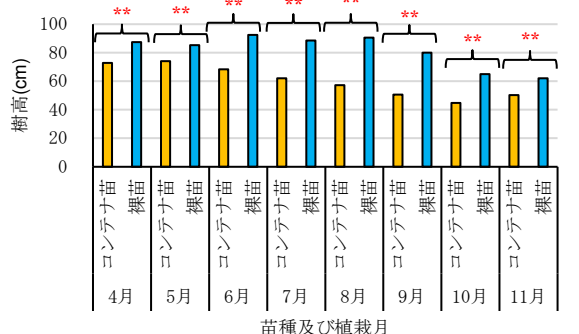
注：表中の「**」は 1% 有意差、「*」は 5% 有意差を表す。（フィッシャーの正確確率検定）



注：表中の「**」は 1% 有意差、「*」は 5% 有意差を表す。（マン=ホイットニーの U 検定）

図1 1か月後の生存率

図2 令和6年11月時点の樹高(鳥取市)



注：表中の「**」は 1% 有意差を表す。（マン=ホイットニーの U 検定）

図3 令和6年11月時点の樹高(日南町)

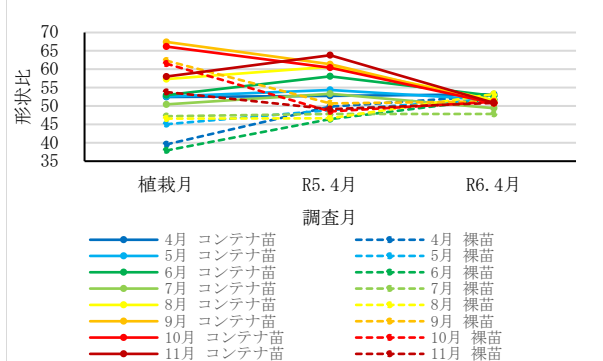


図4 形状比の推移(鳥取市)